

平成23年12月3日  
TADESKA 第55回例会  
土屋 亮 (福岡大学)

## 《活動内容報告》

### 序. 9月の件

担当者（土屋）の今回の発表は、TADESKA が2011年下半期の活動として選らんだ RAE (2009) *Nueva gramática de la lengua española* (『新文法』) を読んでいくシリーズの初回として、本年9月に行われる予定であったが、台風が関西地方を襲い、交通機関に大きな乱れなどが発生したために、今月に延期となったものである。すでに10月と11月の例会が行われてしまったが、「分かったふりをしないで訳して読んでみる」をテーマに、今後『新文法』をよりよく理解するためにも、その出版に至った経緯や、これまでのアカデミアの文法書や辞典との関連性が書かれている「序文」を読むこととした。

### 1. 『新文法』の序文

訳文の質は改善の余地があるが、分量としてはほぼ作業を終えていたので、ここからは担当者が準備した原稿を読み上げ、他の参加者にはスペイン語の原文と日本語訳を照らし合わせてもらいながら、疑問点をところどころで議論していった。また、文法学を専門としない参加者のために、「序文」に登場する各文法書についての説明も補った。

分量の問題もあるので、ここに日本語訳を挙げることはしないが、極々簡潔に記せば、『新文法』の序文には次のことが書かれている。

- ・『新文法』ができるまでの経緯  
(何年のどの会議で、誰によってどのようなことが決められたか)
- ・これまでの文法書などとの関連  
(アカデミアの名前で出た1931年の文法書以来になるということ、*Esbozo*『素描』やアラルコス『スペイン語文法』などとの関連。ただし、1999年出版の『記述文法』のことは一切触れられていない。それどころか、「これまでにスペイン語は、テキストからの引用例に基づく網羅的な記述文法書を有したことがなかった」とさえ述べられている。)
- ・『新文法』の性格  
(電子コーパスの種類、記述的か規範的か、地理的変種と統一性、汎スペイン語圏的目標)

### 2. グループ・ディスカッション (我々の知識とスペイン語の姿について)

上記の『新文法』についての活動後、残りの時間を割いて以下のテーマについて簡単に話し合った。

#### A. 教員の知識に関すること

「学生の質問（あるいは同業者との会話）で、はっきりと答えられずドキッとした経験」

#### B. 特にスペイン語に関する知識のこと

「正直言って、尋ねられると困るテーマ・単元」

- ・ラテンアメリカの政治や歴史、最新の流行歌
- ・冠詞や数の選択
- ・（語を選択する問題で）複数可能な選択肢のニュアンスの違いなどが話題に上った。

いずれにしても、知識が多いことに越したことはないし、不断の努力が求められるが、一人の教員がカバーできる知識にも限界や抜け穴がある。知らないことは知らないと言い、誠実な対応ができるかどうか肝要である、ということで意見の一致を見た。

### C. スペイン語に関すること

「教科書や進捗の関係などから、教えたり教えなかつたりする文法項目があると思いますが、何を教えたならスペイン語を教えたと言えるのか、また、地域変種を特に意識しないスペイン語の姿を想定することは可能かどうか」

時間の関係上、下の問題点を指摘したにとどまった。

世界各地で話されている英語 **World Englishes** は地域ごとにかなりの特色がある一方で、スペイン語の均一性のレベルは相当に高いが、それでも語彙、語法、発音などで異なる点はある。これをどう指導すべきか。「理想的なスペイン語」というものを仮定して捨象すべきかどうか。スペインのスペイン語を中心に教え、必要性に応じて各国の特徴的なスペイン語を指導すべきか。